
そして世界は嘲笑う

モヒート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして世界は嘲笑う

【Nコード】

N2660R

【作者名】

モヒート

【あらすじ】

人通りの絶えた住宅街で、それは唐突に起こった。

前兆のない消失。存在の否定、拒絶、断絶、……あるいは隔離。

つまりは、所謂“神隠し”。

現実はあると裏切り、空想は突如に襲いかかる。

そんな悪い夢のような、そんな、事故に遭遇したような、どうしようもない序幕。

少女1（前書き）

はじめまして、管理人です。

今回が初投稿になりますので色々と未熟ではありますが、どうぞご容赦ください。

作者が投稿する小説等は全て本人の娯楽をメインに、自己満足域を達さない場合がございます。なので、読者の中には気に入らないということが多々あるかと思われます。

投稿者としても無理に読んでいただいて非難を頂いてしまいますと、色々とやる気がそがれてし引き籠ってまいりますので、御嫌でしたら無理にお読みいただかなくても良いと思っております。

基本的に管理人は臆病で打たれ弱い、脆弱な現代の若者です。そちらをご了承ください。

それでは拙い文ではありますが、よろしく願いいたします。

少女1

春野聖良は偏差値が少し高めの高校に通うお嬢様である。

といっても家がお金持ちというわけではない。お嬢様というのも通称で、彼女の見た目があまりにも深窓の令嬢を彷彿させるために、彼女の友達がつけた所謂あだ名なのだ。

ふわふわとした色素の薄い栗色の長い髪に、ぱっちりとした大きな眼。少しうつむけばバラ色の頬にはまつ毛が影をさし、少しくらとした唇はやたらとエロイと同級生からのもっぱらの評判である。目も眩むようなプロポーションこそ持っていないが、手足はすらりとしており全体的に細く、華奢な印象を残す。

彼女の容姿はほぼ母方の祖母より受け継いでおり、母親とはあまり似ていない。彼女の母の髪は濃いどちらかというと黒に近い茶色であるが、髪を染めていない人のほうが少ないかもしれない現代ではありふれた色であった。その点彼女は見事に遺伝を受け継ぎ、波うつ髪はそれこそ光に透ければ黄金色と見間違わんばかりである。

両親はそこまで容姿端麗というわけではなかったが、二人とも相思相愛で未だ経っても新婚と思われるほどだ。だからと言って子供を疎んじているわけではなく、彼女は二人の愛情を惜しみなく浴びて育ってきた。

幼い頃は祖母のもとで育てられたため、日本語は当然ながら英語

は勿論、仏語も難なくお手のものである。

どこをどう見ても、類を見ないほどにお嬢様であった。

その思考回路をも含めて。

＊＊

穏やかな風に吹かれて、少女はふと目を覚ました。

まず目に入っただのは幾重にも重なるレースと、その向こうから射す日の光。昇りきっていないためか、又は硝子に阻まれているせいか強さはあまりなく、ただ一日の始まりを告げていた。

目を慣らすように瞬く彼女に声がかかる。

「おはようございます。セーラ様。今朝も健やかな目覚められたことに感謝を」

「…………ええ、あ、あー、おはようエマさん」

少し戸惑いつつ挨拶を返して、セーラと呼ばれた少女は苦笑した。日を一面に浴びた部屋を目だけで一通り流し見て、メイド服を着た己の侍女に向かってお願いを試みる。

「エマさん、その、やっぱり様付けは……………」
わたし庶民出身だし、やっぱりなれないって言うか恐れ多いんだけど。

特にエマさんみたいな美人に言われると場違いにもほどがあるし、なんか居た堪れないです。それにわたし民主主義の階級制度のない場所です。だからほら、せっかくのお友達には普通に呼んでもらいたいといいますか…………つまりは敬称なしの呼び捨て希望で！

「では姫神子様」
プリンセス・シレーシア

間一髪で放たれた別名にセーラは撃沈した。

毎朝のことなので返答する侍女には微塵の迷いもなければ戸惑いもなく、というよりむしろ別名で呼べたことに対する喜びさえあふれているようで、放っておけばこの後もその呼び方で呼ばれてしまいかねない。

実例がほかにいるだけに、まさかとは言えない。勝率が少ない賭けを行うには、代償があまりに重い。その代償の名を、羞恥心と呼ぶ。

まさかの時は、プリンセス・シレーシア延々と姫神子様と呼ばれ続けるのである。

プリンセス・シレーシア
姫神子様だ！

この国の人たちがどう思うかは定かではないが、現代で育ったセーラにとっては拷問に近い呼び名である。何といっても“プリンセス”が付くのだ。幼児でもない限り付加されて嬉しい形容詞ではない。

それでも通称なので、改まって呼ばれるとさらに長くなる。おまけに恥ずかしさも倍増。

みんな正式名を呼びたがるので、一人でも許してしまった場合は恐ろしいことになるかねない。とういか、絶対なるに決まっている。容易に連想できる環境にいることに絶望した。

断固拒否しなければ、どうなるかわかったものではない。
諦めて頭を抱えた。

「うー。名前呼びがいいですー……」

「ふふ、本日はいかがなさいますか、セーラ様」

慣れたように笑う侍女に恨めしげな視線を送りつつ、往生際悪く
うなり声をあげる。差しのべられた彼女の手を借りて寝台から降り
て、今日も今日とてセーラは白旗を振った。

「おまかせします」

朝だというのに、放たれた言葉には微塵の生氣もなかった。

少女1（後書き）

さてさての始まりです。

どうぞよろしくお付き合ってくださいませ。

少女2

宗教国家ヴァーナシア・イ・ラ・リユート。

通称、聖国シャイラ。

祝福の女神シヴァーレナーシャを奉る国である。

国としては小さな部類であるが、歴史は一千を超えてと古く、また『祝福の女神』シヴァレーシアを信仰する宗教の総本山が建てられている国でもある。

周りを大小の国々に囲まれているため海に面してはいないが、土地の七割が平原と森林であるため比較的豊かで、山地にいくつか湖を有しているため、水源に困ることもない。

気候もほぼ穏やかで、極端な寒さや暑さがないので動植物も豊富である。

これほどまでに豊かな領土を持つ国を他国がほしがらないはずもないが、しかしこの国は未だかつて戦をしかけられたことはなかった。

その理由としては、やはり宗教がまず挙げられる。

女神信仰は大陸を代表する二大宗教の一方であり、その総本山である聖国シャイラを攻撃するということはすなわち、女神信仰者を敵に回すということである。高々一国が勝てるような相手ではないのだ。これに二大宗教のもう一方が加われれば最悪である。大陸全土はたちまち戦乱に包まれ、血を血で洗う戦いが続き、收拾がつかなくなる。なので、下手な宣戦布告は己の首を絞めるだけなのだ。

宗教が、この国を生き残らせ、歴史を誇る国家へと変貌させた。

そしてもう一つの理由が、魔導学園アカデミーの存在である。

この国は、優秀な魔導師数多く保有しており、そして学園を建設したことで魔導の質を高めたのだ。

魔導学園リヴリジスト（アカデミー）

リリアはその日、非常に張り切っていた。

それというのも、十日後の学園祭の日に、何と聖女様が学園を訪れてくれるというのだ。聖女様の訪問は半月ほど前から噂されていることだったが、まさか本当のことだとは思わなかったのである。しかも、だ。その聖女様を案内する生徒の一人に彼女が選ばれたのである。

張り切らずにはいられなかった。

だがまたとない機会なのはなのも自分たち生徒だけではないことは分かっていた。自分たちにとってそうであるということは、聖女様を狙う不届き者にとっても貴重なチャンスであるということなのだ。聖女様を楽しませるためにはもちろんだが、警備のためにもやることは山のようにある。

何が何でも学園祭を成功させて、聖女様に気に入っていただかなければ！

そしてできれば、聖女様の御身を直に拝見させていただいて、お声を拝聴できれば……！

彼女は健全で盲目的な、信仰深い信者であった。

絢爛と続く廊下を曲がり、両開きの大きな扉の前に立つ。

「リリア・アンジェロ、参りました」

「お入りなさい」

「失礼いたします。」

入って一礼をする。

学園を代表するのであれば、不作法があってはならない。手の指先まで神経を通わせ、なめらかに動かしながら、少女は完璧な礼をとって見せた。

そしてゆっくりと視線を床から離し、リリアは絶句した。
室内には彼女のほかに八人の人間がいた。

一人は学園長であるガヴァレル・トファレ様。

その隣に副長であるアイリス・イオーレー様。

そして近衛騎士長のヴァンシア・クロード様。

この三名までは理解できた。学園長と副長は学園の責任者であるし、近衛騎士長は聖女様ご来訪の警備のためで、そしてほかの五人は…。

ちらりと問題の五人に視線を移して、リリアは沈黙した。

一人は金髪と褐色の肌、そして豊満な肉体が特徴的な女剣士だった。背は高く、露出された腕や足はきれいに筋肉が行き渡っているように見えた。赤い口紅が魅惑的で、目が合った瞬間微笑まれて、リリアは赤面した。

一人は黒髪黒目黒服の美青年。腰には鞘に収まった剣が二本添えられているので、どうやら双剣士のようなのである。目を凝らしみるとぼんやりと剣に魔力がまわりついているのが見える。どうやら本業は魔剣士のようなのだ。だが全身黒ずくめであるからして、大層不気

味である。頭の天辺から靴先まで黒ずくめとはこれいかに。

一人は長めの茶色の髪 of 青年で、目は細く柔和な顔立ちをしている。魔剣士よりは劣るものの、平均的な身長である。手にロッドを持っていることから魔導師のようだ。否、もしかしたら精霊使いかもしれない。

一人は少し身長が低めの、黒髪黒目の女だ。一人だけ若く、もしかしたらまだ十代かもしれない。ゆったり目の服を着ており、武器らしい武器は特にはなかった。導師だろうか？無表情で学園長たちを見つめている。

最後は異様に背が高く、また極端に筋肉質だった。長い赤毛の髪はまるで背中を覆う鎧でもあるかのように逆立っており、ハリネズミを連想させた。といっても一瞬で、体格差があまりにも違うため比較対象から外す。己の肩幅以上の幅の鞘には大剣が収められているのだろう。大き過ぎて少し怖い。

五人のあまりにも統一性のないでだちに視線を彷徨わせ、最終的にリリアは副長に目で助けを求めたが、その前に艶やかな微笑の聲が漏れ聞こえる

あまりにも少女らしい（うろたえた）表情に女剣士は笑いを零し

ただ。

「うふふ、可愛いお嬢ちゃんね」

「え、あ、リ、リリアです」

「聞いたわ。アウグス・ラーリンよ」

勇気を出して名前を名乗ってはみたが、あっさりと名乗り返されて微妙に困ってしまう。微笑もそのまま、流れからしても明らかに笑われているのは自分だった。

なぜ笑われているのか知りたいが、誰に聞けばいいのだろう。一般的な思考からすると学園長、または副長であるお二人に聞けば間違いないのだろうけれど、でもそこまで親しいわけでもないのにいいのだろうか。近衛長は端から除外対象である。そもそも話したことがない。

この部屋に一般教師がいないことがどうしようもなく悔やまれる。せめて特別講師でもいいから何人かはいるべきのはずである。部外者五人に対して関係者四人の、しかも四人のうち一人が生徒なのだ。何かあったらどうするつもりなのだろうか。

混乱のあまりリリアの思考は破綻し始めた。

それでも貴族として培われてきた教育は、今までの特訓の成果とばかりに彼女の表情を困惑顔のまま保たせ、内心を上手に覆い隠してくれた。

もちろん困惑の感情も確かにあったので、まるっきりの偽装でもなかったが。

困惑の表情を見て助け舟を出してくれたのは意外にも、問題の五人の中の一人だった。

「『天上の炎華』^{フレイア}、あまり年下をからかうものではありませんよ」
柔和な顔をした青年はそう言って軽く頭を下げた。

「失礼いたしました、リウと申します。家名は申し訳ながらも放浪の半ばゆえ控えさせていただきます」

「おいおいおい！！なーにを気取ってやがる」

気取ったように礼をとる青年の律義さを笑い飛ばすように、大男が笑い声をあげた。いかにも背中を叩きそうな身振りをしたかと思えば、大男は自分を指さして自己紹介を始める。

「まあいいがな！オレはヨーラン・ハリスティ、よろしく頼むぜ嬢ちゃん！！」

「は、は、はいいいい！！」

ガハハッ、と大男は笑い声をあげる。

陽気な男を仕方なさそうに眺めているところからすると、大男と女剣士は面識があるようである。大声に怯みながらも、リリアそう読みとって一言も声を発さない残りの黒髪二人をちらりと見上げた。

「ところで、お二人の名をお伺いしても？」

空気を呼んだのか、青年が尋ねる。先ほどもフォローを入れたことと言い、意外と気遣いのできる人なのかもしれない。異色の五人に混じっているからわからなかったが、案外まともな人のようだ。評価を付けるリリアをよそに、促されたのか、男が口を開いた。

「……ヤーヴェ『闇』」

ぽつりと落とされた呟きに、先に自己紹介をした三名もさすがに沈黙した。

ヤーヴェ
闇。

それは夜の神の五使徒の中の一使徒。ヴェース

夜の闇より現れ、静かに影のように去る。

その使徒の役目は夜の神にヴェース害をなそうとしたものを捕えることであり、憂いを払うことだという。

しかしこの場合は持っている二つ名に驚いているというより、むしろその名乗りに呆れた。

性格の差か、ヨーランが呆れを隠さずに頭を掻きむしりながらため息をついた。

「そりゃア二つ名じゃねえかよ。普通の呼び名はねえのか」
「無用」

「無用じゃねえよ。さつさと名乗りやがれ」

「『闇』」

「だからよオ」

「『闇』」

「……………」

「『闇』」

「デメェっ、おちよくってんのかアアア!?」

喧嘩に反転しそうな二人に慌ててリウが諫めに入る。

「ちょッ、あなたが切れてどうするんですか!長い髪に反して随分と短気ですね!?!」

「ちょっと。髪は関係ないでしょう失礼ね!」

まったくもってその通りである。
内心で頷いた。

「それだとあたしも短気見たいじゃない！」
そっち!？」

ちなみにアウグス・ラーリンは短髪である。

「え、えーと、そちらの方のお名前は……」
「シラという」

単語でないだけ、マシなのかも知れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2660r/>

そして世界は嘲笑う

2011年10月8日19時58分発行